

American Popular Literature



AMERICAN FUTURE-WAR FICTION: CHINA AND JAPAN, 1880-1930

アメリカ近未来戦争小説集, 1880-1930: アメリカ対脅威の極東アジア

監修・解説: 巽 孝之 (慶應義塾大学教授)

Part 1: Volumes 1-6

ISBN 978-4-86340-019-1 • 全6巻 • c. 1900 pp. • 2010年11月刊行 • 定価(本体95,000円+税)

Part 2: Volumes 7-12 + 別冊解説

ISBN 978-4-86340-020-7 • 全6巻 • c. 2300 pp. • 2011年6月刊行予定 • 予価(本体95,000円+税)

Athena Press

AMERICAN FUTURE-WAR FICTION: CHINA AND JAPAN, 1880-1930

初期アメリカSFの主要なテーマに、空想上の近未来戦争小説がありました。その中で、特に中国あるいは日本との対決を描いたものについてセレクトされた、初めての極めて特徴的なコレクションを刊行いたします。

最初に取り上げる1880年刊行の*Last Days of the Republic* (1880)が、おそらくアメリカで初めての、外国との対戦を想定した近未来戦争小説です。この時代、安価な労働力として流入した中国人が西海岸で増えており、アメリカ本土に暮らす彼らを、潜入敵対軍事勢力(トロイの木馬とか“第五部隊”とか言われます)と想定しています。

一方でアメリカの領土拡大が太平洋を越えてハワイやフィリピンにまで及ぶところとなり、太平洋・東アジア地域での衝突危機や軍備増強がアメリカ社会での関心事となるなか、この間急速に近代化を進める日本が、日清戦争に続き日露戦争で列強国に数えられていたロシアにまで勝利したことで、日米間の衝突のほうがかむしろ現実味を帯びて捉えられるように変化してきています。さらに、本コレクション最後にある1929年刊行の*The Red Napoleon*の頃になると反共的愛国主義

に満たされたものになって行きます。

このように、人種的・軍事的・政治的な関心から書かれていた対外戦争・反アジアの読み物は、時代の変化とともにその内容、テーマ性も徐々に変化を見せています。その傾向は本コレクションにはつきりと表れています。

また、この類の小説の特徴として欠かせないのが、科学的進歩への関心です。刊行年が進むにつれ科学的な表現内容も増えてきており、“スーパー・ウェポン”まで登場するようになります。圧倒的な敵勢力を一発で壊滅させてしまうがごとき超能力的科学兵器は、ギリシャ劇に見る“デウス・エクス・マキナ”の近現代的表象なのでしょうか。



Contents PART 1

全6巻 ISBN 978-4-86340-019-1
定価(本体 95,000 円+税)



Volume 1

Short Stories, by Robert Woltor, Robert W. Chambers, Marsden Manson, Mark Twain, Jack London, etc.

著名作家の注目すべき短編をセレクト。

Volume 2

Pierson W. Dooner *Last Days of the Republic* (1880)

やがて起りうるアメリカ-中国間の世界支配に関わる争いのなかで、中国移民がいわゆる「第五師団」、内在する敵軍に転ずる可能性を示唆した警告的な小説。中国移民の際限のない流入がアメリカ国民の生活を浸食し始める。兵士として、労働者として地位を築き、さらには「アメリカ合衆国の娘」との結婚。こうした状況が徐々に拡大し、やがて南部は中国人に覆い尽くされる中、アフリカ系アメリカ人は「消え去り、死に絶えて」しまう…。

Volume 3

Arthur Dudley Vinton *Looking Further Backward: Being a Series of Lectures Delivered to the Freshman Class at Shawmut College by Professor Won Lung Li* (1890)

ある部分、Edward Bellamyの西暦2000年を舞台としたユートピア小説「顧みれば」(*Looking Backward*, 1880)で提示されたユートピアの弱さを示そうとして描かれたと思われる。アメリカが中華帝国の一地方になってしまい、中国人の歴史教授リーがアメリカの生徒たちに中国のアメリカ征服の歴史を教え、アメリカ没落の原因を教えている。「生産の支えがない富は弱体の要因なのだ」と語るシーンは示唆的。

Volume 4

John Henry Palmer *The Invasion of New York; or, How Hawaii Was Annexed* (1897)

未来に舞台を設定した警告的な物語で、おそらく日本を敵対国とした最初の小説(ここではスペインと日本が同盟関係に設定されている)。日本の人々をアメリカ人が排斥したことを端緒として日本は戦争を開始し、このときスペインはキューバをめぐるアメリカとの対立があって日本と同盟を結ぶ。ニューヨークに新兵器で迫る敵を、対抗新兵器で迎撃、この後反撃に出て、日本の港を爆撃、大阪、横浜、神戸を占領する。戦後の条約により日本は巨額の賠償金を支払う、という筋書きは未来を予見していたかのよう。

Volume 5

“Oto Mundo” *The Recovered Continent: A Tale of the Chinese Invasion* (1898)

1920年代から1930年代を科学がものすごく進歩した未来として舞台設定したタイムトラベルの物語。巨大な飛行船が猛スピードで飛び交い、新しいエネルギー装置が電気を高層圏から引き出す。そして中国の革命がインド、ロシアに対して広がって、最後は世界を征服していた。並はずれた科学力と進歩した兵器開発力を背景として…。

Volume 6

Gensai Murai *Hana: A Daughter of Japan* (1904)

村井弦斎が日本の良さを世界に届けようとして書いた、日露戦争期の戦争ロマンス。日露戦争での日本の勝利は西欧列強にとって非常にショッキングで、日本に対する考え方を改めざるを得なかった。日本は極東及び太平洋地域での政治的影響力を高めて帝国としての地位を築き始めており、極東地域を題材にしたアメリカの未来戦争小説は、その主要な対象を中国から日本に変えつつあった。

Contents PART 2

全6巻 ISBN 978-4-86340-020-7

定価(本体 95,000 円+税)



Volume 7

Roy Norton *The Vanishing Fleets* (1908)

アメリカの政策に反感を募らせた日本が中国、イギリスと同盟関係を形成、強大な艦隊を構築する。日本はフィリピンとハワイを侵略、そしてその鼻先をアメリカに向けたとき、突如として…。音速で飛ぶ超強力兵器が登場するほか、アメリカを共産主義化しようとする日本の諜報機関の活動を描いて、ロシア革命のおよそ10年前に書かれたにも関わらずアメリカにせまる共産主義の脅威に警告を発している。

Volume 8

“Parabellum” *Banzai!* (1908)

ドイツ人フェルディナンド・ハインリヒ・グラウトフによって書かれたがアメリカで手を入れて出版された。アメリカでは相当に売れた様子。内容は、フィリピンをめぐって日本とアメリカが初めて直接対決する警告的小説。日本が海上での戦いに勝利した結果、アメリカ西海岸は日中の移民で覆い尽くされ、いわゆる「第五部隊」のような状況に。アメリカは反撃に転じ…。日本に対する財政支援が露見したイギリスを非難し、アメリカ側に付く立場表明をしたドイツの主張が大きく認められる、といった内容も出てきて興味深い。

Volume 9

John Ulrich Giesy *All for His Country* (1915)

日本が東西両海岸を侵略、日系移民が暗躍して、超高性能爆弾の保有を背景に緒戦から勝ち進む。アメリカの艦船は破壊され、アメリカ軍はその両海岸を放棄せざるを得ないが、スーパーウェポンの開発で勝利を引き寄せる。日本がハワイとフィリピンさえ放棄するまでの見事なハッピーエンドながら、スーパーウェポンの開発者はその兵器が引き起こした大量殺戮についての嫌悪感にさいなまれる…。



Volume 10

William B. Shearer *Pacifico: A Novel Based on Truth, Fiction and Possibilities* (1926)

イギリスとドイツから軍事的ノウハウを学んだ好戦的で国粋主義的な日本という設定がされた海戦もの。イギリスで学んだ山本艦長、ドイツ人の父と日本人の母を持つ悪玉の小村伯爵、日本人傭兵の後ろ盾を持つフィリピン人暫定政府のクーデターの失敗、フィリピンの在留日本人などが登場する。本書では、国際連盟もボルシェビズムともに欠陥があるものとされている。



Volume 11

William Delbert Gann *The Tunnel thru the Air; or, Looking Back from 1940* (1927)

日本、スペイン、メキシコが連合を組みアメリカに宣戦。アメリカでは当初緒戦にて敗退が続くが、億万長者の発明家ロバート・ゴードンがアメリカ軍に加わり最高司令官となって状況は一変。自らの発明を軍事転用、さらなる兵器開発で戦況を打開していく。ゴードンは信心家でもあって、聖書から兵器発明のヒントを得ていた。やがて設立された世界連合帝国のなかで、アメリカはその兵器すべてを保有する立場になる。そこには全世界の人口を消滅させるほどのスーパーウェポンも…。

Volume 12

Floyd Phillips Gibbons *The Red Napoleon* (1929)

当時の著名なラジオ・コメンテーターで従軍記者でもあったギボンズの空想戦争小説。この小説の中に自らをジャーナリストとして登場させ、ロシアとモンゴルのハーフ、Karakhan of Kazanの年代記を記述する形態で話を進めている。Karakhanは革命に参加、ロシアの独裁者に。その支持を受けて世界が革命化、アジアはヨーロッパ帝国主義を駆逐、北アフリカ植民地は反乱をおこし、日本はフィリピンを併合する。ヨーロッパとアジアのほとんどがKarakhanの掌に入るがアメリカ軍が大海戦と大空中戦ののちにこれを打ち破る。ストーリーには、人種間の緊張や不平等を抑えるための意図的な人種混交政策があり、また「人種偏見と資本主義の欲望」に対抗する戦争との語りもあり、当時の人種差別に対して強い警鐘をならした小説ともされる。

監修の言葉

異 孝之 ●慶應義塾大学教授

19世紀末から20世紀初めにかけての時期は、アメリカにおける自然主義文学の勃興期として親しまれてきたが、それはまったく同時に、近未来戦争小説と呼ぶべきジャンルの勃興期とも共振していた。しかもそれらの作品群では、日清戦争、日露戦争に起因する黄禍論的言説の蔓延を反映するばかりか米西戦争や米比戦争をも意識して、アメリカの仮想敵に日本や中国を定めるのみならず、ときにフィリピンやメキシコとも共犯関係を結ぶものと見なす風潮が濃厚だった。かくも巨大で豊饒なジャンルを形成しながら長く文学史の底に埋もれていた近未来戦争小説群を、そもその起源たるビントン・ドゥナーの1880年作品からエドワード・ベラムの痛烈なパロディを試みたアーサー・ダブリー・ウィントン、科学技術大国となった中国の世界支配を描くオト・ムンド、当時想像できる限りの超兵器を乱舞させるウィリアム・ガン、人種的偏見を撤廃させる平和へのメッセージが印象的なフロイド・フィリップス・ギボンズまで、ここにお届けできるのは望外の喜びである。

ふりかえってみると、イギリス作家H・G・ウェルズは1897年に雑誌連載され、1898年に単行本として刊行した『宇宙戦争』(The War of the Worlds)において、地球を襲うタコ型火星人に代表される異星からの侵略者のイメージのうちに、西欧文化圏以外の覇者が発揮する恐怖と蠱惑とを同時に投影しつつ、そのエイリアンがじっさいには地球上のウイルスによってあっけなく死滅してしまう顛末を壮大に描き出した。しかしここで肝心なのはむしろ、ウェルズ以後の近未来小説においては、非白人種こそ最大の疫病であり、西欧はまさにそれを撃退する超兵器を不可欠のものとするという視点が導入されることになった点だろう。たとえばギャレット・サーヴィスの『エジソンの火星征服』(1898年)は『宇宙戦争』続編として書かれており、エジソンが火星人以上の電気宇宙船を発明し火星へ押しかけ、結果的に超兵器による異民族殲滅とアメリカ帝国主義を手放しで賞揚するという展開になっている。同じ世紀転換期に活躍した代表的な自然主義作家のひとりジャック・ロンドン Jack London は、1910年発表の短篇『比類なき侵略』("The Unparalleled Invasion")において、明らかに日露戦争以後の黄禍論に立脚した政治的人種偏見を中心に、ウイルスとしての黄色人種を殲滅するべく、アンチ・ウイルスとしての細菌兵器を解き放つ。

同じころには、ロイ・ノートンの小説『ほろびゆく艦隊』(1907年)が、アメリカン・インディアンならぬ共産主義勢力の台頭を「赤い脅威」と見てロシア批判を試みていた。

とりわけ注目すべきなのは、世紀転換期アメリカ最大の作家マーク・トウェインもまた、1904年から1905年にかけて、疑似童話仕立てのエッセイ「蠅とロシア人」および「黄色い恐怖にまつわるたとえばなし」において、日清・日露両戦争を引き金に湧き起こったアジア系とロシア系双方に対する外敵恐怖を風刺しながら、きわめつけとして米西戦争とフィリピン＝アメリカ戦争(1899-1902年)への辛辣な揶揄を含む短篇「戦争の祈り」("The War Prayer")を書き上げていたことだろう(日本マーク・トウェイン協会英文号 Mark Twain Studies 第2号の特集参照)。しかも、彼がこれを執筆するさい最大のヒントとなった靈感源に、まさしく世紀転換期を代表する日本人知識人・村井弦斎の英文小説が想定される。昨今、黒岩比佐子の本格的評伝『「食道楽」の人 村井弦斎』(岩波書店、2004年)を得て再評価の気運が高まっているこの作家は1904年、日露戦争をにらみ国際社会における日本の美徳を宣言する意図により、本叢書にも収録した長編小説『ハナ——日本の娘』(Hana: A Daughter of Japan、報知新聞社＝ギャランティー社、川合運吉訳、1904年)を発表したが、同書をほかならぬトウェインが1部購入しており、そこには彼が一読した形跡すら残っているのである。はたしてその序文において弦斎はこう書く。「悪意をもって人に血を流させるような行為におよべば、それは犯罪であろう。ただし外科医がメスをふるったとしたら、それは正当なる行いとみなされ、人々に崇められるであろう。戦争とは時として犯罪である。とはいえ、安泰なる国家がやむをえず武器を取り、自らの高潔や栄誉、幸福や平和をふみにじる残虐なる怪物の攻撃をはねかえすときには、その守りの剣は神聖なるものとみなされ、その戦いは世のため大いに貢献することとなる。」

弦斎はこうした戦争の正当化を大真面目な長編ロマンスに仕立て上げたが、トウェインは同じ論理を短篇においてブラックユーモア豊かに表現した。アメリカにおける近未来戦争小説の勃興期は、じつは環太平洋的な文学史の形成期とも重なっていたことを、このエピソードは何よりも雄弁に物語る。

【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】